年頭のご挨拶

林産試験場長　川西 博史

あけましておめでとうございます。
2024年の年頭にあたり，皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

旧年中は，当林産試験場の運営や研究の推進にあたり，ご理解ご協力をいただき，誠にありがとうございました。

昨年の5月には，コロナウィルス感染症が5類に移行し，イベントや会議などの多くが対面で行われるようになりましたが，互いの表情や身振り手振りを見ながら，直接聞こえる生の声でやりとりをすると安心感のようなものがあり，やはりこれがコミュニケーションの基本なのだろうと改めて感じたところです。

当場においても，研究課題の検討会議や道民向けのイベントである「木になるフェスティバル」を久々に対面で実施したほか，道内・国内からはもとより，ＪＩＣＡの研修など海外からも含めて，多くの見学者が訪れるようになりました。

一方，コロナ禍において，会議などのオンライン開催が急速に普及し，遠隔地での講演会等にも格段に参加しやすくなるなど，全国各地や世界中の人との交流も容易になり，時代が一歩進んだ感じもしています。

長いコロナ禍で人との接触を避けてきた反動なのか，昨年の春～秋頃には，特に子供たちの間でインフルエンザやヘルパンギーナなどの感染症が流行っていたようで，「やはり人間はウィルスや菌類とうまく付き合いながら生きていくしかないんだな」などと思っていたら，何気なく観たＴＶの科学番組では，人間の遺伝子の一部にはウィルス由来のものが組み込まれているが，これは進化の過程でウィルスを取り込み，高度な体の機能を獲得してきたものであるいう説が紹介されていて，妙に納得させられました。

林業・木材業界では，コロナ禍においていわゆるウッドショックが起こり，最初は経済活動の停滞による木材需要の急減，次いで米国での木材需要の急拡大やコンテナ不足，ウクライナ戦争等を背景とした輸入材の不足と価格高騰，さらには輸入材の回復や住宅着工数の減少などにより，木材需要の減退と価格低下が起こり，燃料費や電気代の高騰が追い打ちをかけるなど，本当にめまぐるしく情勢が変化してきました。

このように変化の激しい中においても，関係業界で経営をされている皆様がしっかりと舵取りをされ，地域の社会経済に貢献されていることに対しまして，心より敬意を表する次第です。

また，ウッドショックを契機として，国産材，道産材の供給が期待され，一部の住宅メーカーでは，輸入材の一時的な代替ではなく，今後は国産材を継続して使っていくという方針を表明されていますし，道内の製材工場やプレカット工場では，道産トドマツ等の建築材の供給を増やしていこうと努力されている動きも出てきています。

ウッドショックで大変な思いをされた方を前にしてどう表現して良いか難しいのですが，社会経済も生物の進化と同じように外圧を受けたり異物を取り込んだりしてこそ進化していくものなのかもしれません。

いずれにせよ，道産材への期待の高まりは，まさに北海道の林業・木材産業関係者が待望していた状況であり，これをしっかりグリップし，「森林資源の循環利用」がより太くスムーズに流れるようにしていかなければなりません。そのためには，川上ではスマート林業の推進などによる林業生産の効率化や原木の安定供給，川中では品質の確かな道産建築材等の安定供給，川下では道産材を積極的に使った住宅や非住宅の普及，等々が必要であり，これら川上～川中～川下の一層の連携，また産学官の一層の連携を図りながら進めていくことが重要になります。

そして，当試験場においては，「森林資源の循環利用」という大きな目標を見据え，業界や行政，他の研究機関の皆様との連携を深めながら，社会のニーズを具体的な研究課題に落とし込み，成果を出すよう努力して参る所存ですので，本年も引き続きよろしくお願いいたします。